

亡き父母や先祖は、今やお浄土で仏さまとなり、生きている私たちにご恩をよるこぶ身になるよう導いて下さいます。「あなたのそばに」の親心は、南無阿彌陀仏の喚び声と姿を変え、私に寄り添っています。そして、私たちが手を合わせてお念仏申す姿を見て、にっこりとほほえんでくれていることでしょう。

ありがとう



大事な肉親との別れを通して、初めて深い思いに支えられていたことに気付かされます。私もまた、命終わっていく身を、そしてお念仏と共に生き抜く道をお教えいただきます。

“いのちの日”お盆は、生きる意味を教えて下さる大切な仏事なのです。



孟蘭盆経説相図(部分) 朝田寺

連絡先

©監修 本願寺仏教音楽・儀礼研究所

お盆

お盆の由来

むかしむかし、お釈迦さまの特にすぐれたお弟子の一人に、目連尊者という方がおられました。居ながらにして世界のできごとを見たり、他人の心を見通したりすることができる“神通力”を持っておられました。

ある時、その神通力で亡くなった自分の母親の姿を見てみると、餓鬼道に墮ち、やせ衰えた姿になっています。母は我が子を育てるのにやむをえず悪業を犯し、その結果、餓鬼道に墮ちたのです。驚いた目連尊者は、神通力でご飯を鉢に盛って供養しますが、母がそれを食べようとすると、たちまち炎となって食べることができません。

目連尊者は泣き悲しみ、救いをお釈迦さまに求めました。お釈迦さまは静かに説かれます。

「7月15日は雨期の勉強修行期間（夏安居）の最終日で、自らが犯した罪を告白懺悔するために、僧たちが集う日である。そこでたくさんの飲食物をお供えするがよい」（『盂蘭盆経』）

目連尊者がそのようにすると、亡き母親は餓鬼道の苦しみから救われたということです。

お盆とお念仏

こうして7月15日（旧暦）は、私たちを養い育てて下さった亡き父母やご先祖に感謝し、仏さまを礼拝する日になりました。

日本におけるお盆の法要（盂蘭盆会）の歴史は古く、『日本書紀』には、推古天皇14（606）年に初めて営まれたことが記されています。

蓮如上人は文明10（1478）年の盂蘭盆会に際して、『御文章』をお書きになりました。その中では、阿弥陀さまのご本願をよりどころにしてご信心をいただき、ご恩報謝のお念仏を申すべきです、と述べておられます。

そのお示しの通り、お盆には、すでにみ仏とされたご先祖のご恩を思って、お念仏申させていただきます。

功德

盆灯籠

安芸地域（広島県）ではお盆の頃になると、お墓の周りに盆灯籠が飾られ、賑やかな風景になります。この風習は江戸時代、娘を亡くした親が、竹と紙で灯籠を作りお供えしたことに由来すると伝えられています。

誰しも愛しい人とのつらい別れ（愛別離苦）に涙を流してきました。懐かしいあの人の面影は、どれほどの時を経ても、ふと心に浮かび上がってくるものです。亡き人を偲ぶ心が、いつしか盆灯籠をお供えする風習となり、今日に受け継がれているのでしょう。



安芸（広島）地域のお盆の様子

お育てに添えて

久しぶりにアルバムを見ると、幼い私に寄り添う父との写真に「あなたのそばに」という言葉が添えられていました。父が亡くなり、二十九回目のお盆を迎える今、親が案じることは何かと考えます。 — いつもわが子を見守り、成長する姿を喜ぶこと — これを親心というのではないのでしょうか。